『人文学報』第118号（2021年 11 月）
（京都大学人文科学研究所）

台湾におけるミンゾク学の萌芽と日本民俗学

―― 研究者の動向と物質文化研究に着目して ――

角　南　聡一郎*

は　じ　め　に

1985 年の日清講和条約の締結により，台湾は清より割譲され日本の植民地となった。それ以降，1945 年までの 50 年間，日本は台湾を支配した。両国においてこのような負の歴史があることは，紛れもない事実である。しかしながら，台湾では日本による植民地時代について，学問や技術の発展については肯定的に見る向きもある。本稿で述べるミンゾク学（民俗学・民族学）についても，種々の問題はあるものの，台湾では日本植民地時代より現在まで，学的系譜としては断絶することなく連続しているとの認識が一般的である。戦後に研究者や技術者が留用されたという事実もあって，全てではないが，積極的に日本時代からの実務的な部分が継承されたのである。そうした認識は台湾におるミンゾク学の先駆者として，鳥居龍蔵や伊能嘉矩が取り上げられ，彼らの中国語に翻訳された著作が再評価され読み続けられていることからも明らかであろう。

台湾を領有した 50 年の間，植民地は日本人にとって内なる異文化として存在し，その習俗や伝承，物質文化はちょうど産声をあげた我が国のミンゾク学の対象となった。台湾の歴史や文化が日本のミンゾク学に与えたインパクトや影響は決して少ないものではなかった。ここで注目されるのが「内地」と在台の研究者のネットワークである。このネットワークにより台湾でもミンゾク学研究の最新動向を知ることができた。逆に「内地」の研究者も台湾からの情報は，我々「日本人」のアイデンティティーについて熟考する契機となり，論文でも台湾など東アジア周辺諸地域を睨んだ考察がなされていったこと明らかである。さらに植民地で注目されたのは，欧米での先行研究に倣った物質文化研究であった。植民地で収集された物質文化は「内地」へと持ち帰られ展示され，帝国主義的な意味として，もしくは純粋に学問的な「日本

* すなみ　そういちろう　神奈川大学

文化」を考えるための参考資料とされたのであった。

そこで本稿では，主として戦前を中心として，台湾における研究者の動向と物質文化研究の進展に焦点をあて考察を試みてみたい。これまでは植民地のミンゾク学は，日本民俗学と関係づけられて語られることは少なかった。報告者の理解では，戦前についてこれらを切離して個別に取り扱うことは，当時のアカデミズムの全体像を見えにくくするだけである。ひとまず全体像を把握した上での個別論がなされることが望ましいだろう。そのような作業の一環として，ひとまず台湾という場から日本のミンゾク学形成史を眺めてみよう。

1. 台湾におけるミンゾク学の生成と日本民俗学

台湾におけるミンゾク学黎明期の両雄として，前述の鳥居龍蔵（1870-1953）と伊能嘉矩（1867-1925）があげられる。よく知られるように，両者は東京帝国大学理学部人類学教室を開設した，坪井正五郎（1863-1913）の弟子である。彼らは坪井が主宰した東京人類学会に参加し，機関誌『東京人類学会会誌』に多くの報文・論文を寄せた。よく知られるように，この学会は総合人類学の様相を呈しており，形質人類学，考古学，民族学，民俗学などのルーツとなったとされる。日本民俗学の創設者・柳田国男（1875-1962）もこの学会に参加したが，これが日本民俗学を形成する大きな契機であったことは明白である。後に『石神問答』に収斂されていくような，山中共古（1850-1928），南方熊楠（1867-1941）といった先達と結節し，柳田がネットワークを拡大していけたのは，この学会の存在があったからに他ならない。ここではまず鳥居・伊能と柳田との関係を見ることから始めたい。

鳥居と柳田とは，その方向性の違いから，生涯親しく交わることはなかった。そもそも，二人がこのような状況になっていった理由の一つに，椀貸伝説の解釈をめぐる論争があった。鳥居龍蔵は，日本各地に残る椀貸伝説は，アジア諸民族のあいだでおこなわれていた「無言貿易」の一種であると論じた［鳥居 1917］。柳田はこの見解を批判するために 1918 年に「隠れ里」（『東京日日新聞』2 月～3 月掲載）を執筆した。その中で次のように鳥居について反論を行っている［柳田 1989］。

> このあいだ理科大学の鳥居龍蔵氏は，日本学会とかで亜細亜諸民族のあいだに行われた無言貿易の話をせられ，今日日本の各地方に存する椀貸伝説はまた一種の無言貿易である。伝説学者はたいていの事をみな伝説にしてしまう傾きがあるが，椀貸伝説は実はエスノグラフィーの方の材料であるとこう言われたそうである。その意味は十分には解らぬが，もしこの伝説が語るような土俗がかつてあったというのならばもちろん誤謬，もしまたこれが昔のある土俗の訛伝である痕跡であるというのならば，お説をまたずしておそらくは誰

も否とはいうまいと思う。いずれにしても実例を挙げて説明をなされなかったのは欠点であるゆえに，自分はそのお手伝いのつもりで，目下集めかけているいわゆる椀貸の伝説を少しばかりここに列べてみようと思う。一々出処は掲げないが，みな世にありふれた書物から忠実に抜き出したものであることを最初に断っておく。自分は鳥居氏のいわれた伝説学者の中ではないはずであるが，右の椀貸伝説なる名称は実は近年我々の仲間だけで用い始めた語である。（中略）鳥居氏の御意見というものが，もしこれら各地の異伝を親切に考察した上で発表せられたものであったならば，自分等はたとい末梢の問題において観察の相異があるにしても，かような失礼な批評文は出さなかっただろう。

この頃の柳田にとって，物質文化も含むエスノグラフィーというものに対して，ライバル意識が強く，歴史学や考古学といった分野の素材が持ち出されることに対して，否定的であった。それは日本国内の習慣や伝承の状況を精緻に描こうとする，民俗学という独自の学問を形成する上で，必要な作業であった。その意味で，鳥居の広い視点や国や民族を超えて比較するという手法は，柳田にとっては余りにも粗いものに見えたのだろう。柳田は実例を丹念に探るという民俗学の手法を強調している。この一件があったせいか，柳田は鳥居の台湾研究（原住民族研究，考古学的調査）を自著で引用することはなかった。

では同じころに台湾の原住民族や漢族の調査研究を行った，伊能とはどのような関係だったのだろうか。伊能の『台湾文化志』（1928）の序文に柳田が寄稿している。この書物は，伊能の没後，柳田らの骨折りもあって刊行されたものであるという［岩崎 1985］。柳田は序文で次のように伊能を称賛している［柳田 1928］。

伊能氏が壮志を抱いて出でゝ首都の客となつた頃に，新しかった学問は故坪井教授の人類学である。雋敏なる一読書子の忽に其真義を会得して，耳を講説に傾けんとしなかつたにらば却つて不思議である。しかも学業を単なる祖述布桁に止めず，之を同胞眼前の実生活に適用し，更に進んでは南方新附の国民の為に，記録を有せざる者も尚その過古世を闡明し得べきことを，確かめんとしたのは何人であつたか。先生は啻に其首唱であつたのみならず，暫くは之に呼応し継いで起る者すらも無かつたのである。伊能氏が志がもと修史にあつたことは，この文化志が雄篇が充分に之を立証する。しかも人類学は之に供与するに一箇愷切なる人間研究の新方法を以てしただけは無い。却つて其因縁に基づいて意外なる幾多の刺戟を受け，又無限の資料を此方面から逆輸入して居たのであつた。それが先生の台湾調査の余材であつて，且つ学会は屢々之に頼つて，その沈滞の日を支持して居たのを見れば，大いに負ふ所ある者は寧ろ我伊能氏ではなかつたと言い得るかと思う。

伊能は1905年に，台湾から出身地である遠野に帰郷した後は郷土研究に打ち込んだ。その成果である『遠野方言誌』（1926）も伊能の死後，柳田によって出版されている。

また，戦後の『岩手日報』に掲載された石川啄木（1886-1912）の友人でジャーナリストの伊東圭一郎（1885-1957）との対談では，以下のように伊能について回顧している［柳田・伊東1953］。

> 伊東　伊能（嘉矩）さんとお知合になられたのは，いつごろでしょうか。
>
> 柳田　私がはじめて出した本の『石神問答』（明治四十三年）に，伊能さんからもらった手紙をのせてあります。文通はどちらから，はじめたか忘れましたが，あの人は『人類学雑誌』がふるわない時，台湾のことばかり書いておりました。そこで余りおしいので，こちらから岩手のことを聞いてやったのです。ところが本が出てみると，伊能さんの手紙が喜田博士（貞吉）とか，白鳥博士（庫吉）らと一緒にのせられているので，とても気をよくしたらしいのです。これは石神について，いろいろの人から，私が手紙で返事をもらったのを集めたものです。兄の松岡映丘が装テイしたり，なかなか，こった本です。それを一本おくってから，すっかりわが党の士になり，しばしば，それから手紙をやったり，とったりしていました。

伊能の出身が遠野であり，台湾から帰京後は民俗学的に郷土研究をおこなったことに対する敬意を表している。その理由としては，伊能の台湾での調査が非常に綿密なものであり，郷土研究にも通じるスタンスで台湾研究をおこなっていたことなどが考えられる。伊能は総督府嘱託として台湾に居住していたため，調査地へは通うことが可能であった。しかしながら，鳥居は日本に居住し，台湾へは5回調査に赴いた。戦後は民俗学「通い」，民族学は「住み込み」というフィールドワークのスタイルの相異が定説とされたこともあったが，それとは直接関係しないものの，伊能と鳥居の台湾調査のスタンスの差異は興味深い。

2. 台湾総督府旧慣調査会による調査と日本民俗学

台湾総督府は漢族，続いて原住民族を対象として慣習調査を実施した。いうまでもなく，この調査の目的は，植民地統治に供する有益な情報を収集することをにあった。その成果は報告書として刊行され，「内地」の研究者の目にもとまることとなった。特に一連の報告書のうち「高砂族」に関するものは，近年，柳田国男の山人論や折口信夫（1887-1953）の異人論への影響があったことは，既に多数の研究者により指摘されている。

一例をあげると，現在，成城大学民俗学研究所所蔵の柳田国男の旧蔵書を検討した山本芳美

は，柳田がこれら報告書を丹念に読みこんだことを明らかにし，柳田が展開した山人論でイメージした山人は台湾の山地に住まう「高砂族」であったろうことを指摘した［山本 2005］。

当初，日本では漢民族よりも台湾原住民族に対する関心が高かった。それは，漢民族はイコール中国であり，大陸の文化と同じというイメージが強かったためではなかろうか。台湾独自の習俗ということであれば，原住民族が注目されて当然であっただろう。

これら報告書作成に関わった人物の著作に柳田国男が寄稿しているものがある。それは蕃族慣習調査会に調査員として参加した小林保祥（1893-1984）の著書である。その本の序文で，柳田は次のように述べている［柳田 1944］。

> 蕃族慣習調査会の大きな報告書が，二十冊近くも続刊されたのは，既に四十年前のことである。自分も其際は壮年学徒の情熱を以て，片端からそれを読み通した者であるが，（中略）しかし，年をとつてから，私にも段々と心付かれたことは，事実を精確に書き誌して世に遺すといふことと，知って身に沁み思ひを深めるといふこととは，もともと二つの事であつて，稀にしか提携合致するものではなかつた。

引用の後半部分について，当時の感覚ではすでに老境円熟の時期を迎えた柳田は，17 年間をパイワンの 2 部落で過ごした小林と異なり，自身と台湾との関わりは「提携合致するものではなかつた」と十分に自覚していたであろうとの指摘がある［山本 2005］。

3. 日本国内民俗学雑誌における台湾関係論文

では次に，戦前の学術雑誌の様相から，台湾のミンゾク学と国内との関係を検討してみよう。

日本植民地時代台湾において，ミンゾク学関係の雑誌としては『南方土俗』，『民俗台湾』の 2 誌があった。

台北帝国大学土俗人種学教室が刊行した『南方土俗』は，研究室所属の移川子之蔵（1884-1947），宮本延人（1901-1987），馬淵東一（1909-1988）をはじめとして，台北帝国大学をはじめとして在台の日本人研究者が寄稿している。当誌は原住民族を対象としていた。一方で台北帝国大学医学部の形質人類学者・考古学者・金関丈夫（1897-1983）が主宰した，主に漢族研究を取り扱った『民俗台湾』もあった。こちらについては後にやや詳しく述べる。

台湾のミンゾク学がどのように捉えられていたかを考えるための試みとして，日本民俗学が成立してから終戦を迎えるまでの間に，日本国内の民俗学関係雑誌で，台湾関係の論文・報文がどの程度掲載されたかを試算してみた。対象とした雑誌は，『民族』，『旅と伝説』，『民俗学』，『民間伝承』[1]，『民俗芸術』，『昔話研究』である。これらのうち，『民間伝承』，『民俗芸術』，

【表 1】 戦前の学術雑誌にみる台湾ミンゾク学関係論文・報文

筆　者	西暦	タイトル	誌　名	号	頁
鳥居　龍蔵	1926	台湾の古代石造遺物に就て	民族	1-3	123-128
小泉　　鐵	1928	蕃地より（一）	民族	3-3	106
小泉　　鐵	1928	蕃地より（二）	民族	3-3	106
宇野　圓空	1928	生蕃談片	民族	3-3	107-116
小泉　　鐵	1928	霧社蕃社社会組織とガザの研究	民族	3-4	21-43
小泉　　鐵	1928	蕃地より	民族	3-4	44
鹿野　忠雄	1928	ヤミ族の船に就きて	民族	3-5	99-110
小泉　　鐵	1928	花蓮港にて	民族	3-5	110
幣原　　坦	1928	台湾の瑯嶠族	民族	4-1	1-16
西岡　塘翠	1928	日本一の桧山阿里山と伝説	旅と伝説	1-11	59-66
西岡　塘翠	1928	日本一の桧山阿里山と伝説（二）	旅と伝説	1-12	63-70
西岡　塘翠	1929	珍しい台湾のお正月	旅と伝説	2-1	54-57
西岡　塘翠	1929	台湾の謎「灯猜」― 面白い戯事とその由来 ―	旅と伝説	2-2	30-35
小泉　　鐵	1929	卑南社の祭の記録	民俗学	1-1	17-23
小泉　　鐵	1929	アミ族帰化社の粟播き祭	民俗学	1-3	191-192
移川子之蔵	1930	台湾東部阿眉族の呼称パンツァー（Pangzah）に関する二三の考察	民俗学	2-1	149-158
浅井　恵倫	1931	台湾蕃族民俗資料（一）	民俗学	3-1	52-54
浅井　恵倫	1931	台湾蕃族民俗資料（二）	民俗学	3-4	235-237
小泉　　鐵	1931	蕃族の社会組織に関する資料（一）	民俗学	3-7	395-398
石田幹之助	1932	台湾蕃曲レコード	民俗学	4-9	706-708
西岡　塘翠	1933	台湾人の婚姻奇話	旅と伝説	6-1	184-188
田中　　敬	1935	日本の本土と関係ある台湾生蕃の伝説（一）	旅と伝説	8-6	20-26
久長　興仁	1936	台湾の食物	旅と伝説	9-1	90-92
西岡　英夫	1936	台湾人と食物（附生蕃人の食物）	旅と伝説	9-1	92-112
高　　碧山	1936	珍奇なる台湾の飲食物に就て	旅と伝説	9-1	113-115
西岡　英夫	1936	鼠と台湾 ― 習俗と口碑伝説のいろいろ ―	旅と伝説	9-6	49-58
古野清人・馬淵東一	1938	虹をめぐる高砂族の口碑と習俗	旅と伝説	11-7	75-79

『昔話研究』については該当する論文・報文は存在しなかった。これをもとに作成したのが表 1 である【表 1】。

この結果として 3 誌で 27 本が確認された。最も早いのは，鳥居龍蔵であるがこの報告は考古資料を対象としたものである。最も本数が多かったのは，小泉鐵の八本である（ただしその半数は台湾現地からの通信の類）。小泉鐵（1886-1954）は文学者で，『蕃郷風物記』（1932，建設社），『台湾土俗誌』（1933，建設社）の著書を残している。続いて多いのは西岡英夫（1879-？，号は塘翠）の 7 本である。西岡は，台湾製壜常務取締役で児童文学研究家であった。宇野圓空（1885-1950），古野清人（1899-1979）といった内地の宗教民族学者，幣原坦（1870-1953），石田幹之助（1891-1974）ら歴史学者，移川子之蔵，馬淵東一ら台北帝国大学土俗人種学教室メンバー，他に台北帝国大学の言語学者・浅井恵倫（1894-1969）や民族学・考古学の鹿野忠雄（1906-1945?）がある。久長興仁は台中市在住の詩人である。

【図 1】『旅と伝説』1-11 表紙（1928）

【図 2】『旅と伝説』8-5 巻末広告（1935）

『旅と伝説』1/11（1928）表紙には西岡英夫の「日本一の桧山阿里山と伝説」にちなんで，「台湾の阿里山蕃人（女）」の写真が使用されている【図 1】。また，同誌 8/5（1935）の巻末には，『台湾高砂族系統所属の研究』，『原語による台湾高砂族伝説集』の広告が掲載されている【図 2】。

馬淵東一は戦後台湾で復刻された『南方土俗』に次のような言葉を寄せている［馬淵 1973］。

> 全冊揃いの『南方土俗』を入手することは久しく至難であったが，婁子匡先生[2)]の経営による東方文化書局からその景印本が刊行されることになったのは慶賀にたえない。中国民俗学の先駆者の一人たである同先生は日本民俗学にも関心が深く，佐佐木喜善氏とも早くから接触があり，また，二十数年前には戦禍の跡がまだ生々しい東京を訪問して柳田翁と歓談され，筆者もその席に列している。

移川も柳田と親交あり，柳田は移川らの『台湾高砂族系統所属の研究』を所蔵していた。

4. 台湾の物質文化研究と民芸運動・アチック・ミューゼアム

台湾における物質文化研究の発展には，宮本延人，金関丈夫，鹿野忠雄，国分直一（1908-2005）といった考古学者の関与が顕著であるが，ミンゾク学者も少なからず関与した。鳥居龍蔵が収集した台湾資料には出土考古資料と伝世民俗資料があり，当初はいずれも東京帝国大学理学部人類学教室の所蔵となった。前者は現在，東京大学，後者は国立民族学博物館に収蔵されている。伊能嘉矩が収集した台湾関係資料は，いったん伊能の郷里である遠野へ持ち帰られ，彼の死後は台湾総督府博物館に寄贈された。その後，台北帝国大学土俗人種学教室の所蔵となり，現在は台湾大学人類学系にある【写真 1】。

【写真 1】 伊能が遠野に設置した台湾館陳列室（伊能 1928）

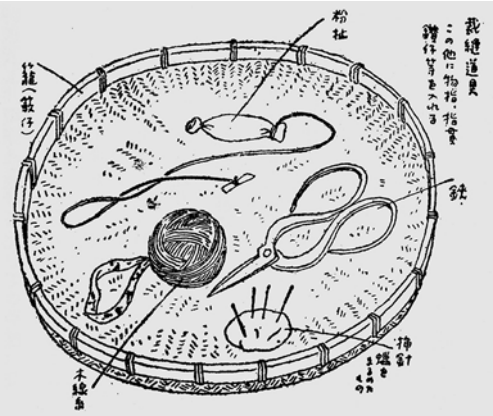
注目すべきは当時の研究者のリレーションであろう。台湾において，研究者の人数も限られていたため，「内地」と比して他分野の研究者との関係は密接であった。だからこそ，ミンゾク学黎明期における主要な研究の場であった東京人類学会の頃のように，異分野がともに雑誌を運営するとか，他分野から寄稿してもらう機会が多かったのではなかろうか。これは，アバタもエクボであり，例えば国分直一のように結果として非常に広い視点から台湾の物質文化を，まなざすことが可能となったのであろう。こうした環境もあってか，考古学者である国分は漢族・平埔族調査をはじめ台湾原住民族の調査もおこなった。

また，柳宗悦（1884-1961）をはじめとした民芸運動関係者は台湾の民芸にも関心をもった。それは朝鮮のそれと比すれば，微々たるものであったが，背景には民芸運動に共感した金関丈夫による，台湾での独自の民芸運動の展開があった。一方で金関は柳田国男にも敬意を払っており，『民俗台湾』には柳田との座談会も掲載された（柳田・橋浦・岡田・中村・金関 1943）。これはまさに人と人のつながりが引き起こした学術交流である。

この台湾独特の状況をよく表しているのは池田敏雄（1916-1981）であろう。『民俗台湾』の主要メンバーであった池田は，島根県出身で 1923 年に台湾へと渡り，1929 年に台北第一師範へ入学し 1935 年卒業，万華公学校で教職に就いた。台湾生まれではないが，限りなく湾生に近い感覚を有していた人物であった。

池田は終戦の直前に『民俗台湾』に寄稿したものをまとめて，『台湾の家庭生活』（1944）を

刊行する。本書の序は金関丈夫によるもので，装幀・挿図は画家の立石鉄臣（1905-1980）がおこない，校正なかばに応召した池田の代わりに後記も執筆している。ふんだんに立石の図や金関らが撮影した写真を掲載し，これを用いて台湾漢族の伝統文化を述べるという池田のスタイルは，まさに『民俗台湾』の申し子であった【図 3】。民芸でもなく柳田民俗学[3]でもなく，池田の学風は金関学流であったといえよう。池田は晩年に，柳と柳田についての貴重な回顧文を残している［池田 1980］。



【図 3】 池田敏雄『台湾の家庭生活』の挿図

柳田国男の民俗学にはじめて接したのは，一九三八年に，創元選書の第一冊として刊行された『昔話と文学』である。それ以来柳田に病みつきとなり，選書の中につぎつぎと加えられる柳田の著書を，待ちどおしい気持で読んだ。そのうち柳田に学んで台湾の民俗を研究したいと思い，日本の昔話のモチーフに似た話を台湾の昔話の中に探したり，柳田説を台湾の民俗にあてはめてみたりした。

あるとき，雑誌の発行所気付で，柳田から絵はがきと「民俗採訪手帳」が送られてきた。稚拙な文章が柳田の目にとまったわけであるが，柳田はこのようにして後進をはげましていたらしい。その手帳は初心者にとってはきわめて親切な手帳で，昔話，食習，漁村，山村などとそれぞれ部門別に一冊になっており，ポイントとなる質問事項が挙げられていた。日本民俗を対象にしたその手帳を，そのまま台湾民俗に適用するわけにはいかないが，それを応用することは可能である。私はまだ若かったので，必要以上に台湾語の原語を残したかったが，その絵はがきには，原稿はできるだけ日本民俗学で使われている用語におきかえた方が，今後の交流に役立つだろうといった意味の注意が書きそえられていた。

なお，『民間伝承』6/1（1933）には，新入会員として台湾の須藤利一[4]と池田敏雄の名が認められる。

一方，池田は柳について次のように述べている［池田 1980］。

柳宗悦に魅せられたのは，金関丈夫先生の影響が大きい。金関先生は人類学者として柳田国男の学問を尊敬しておられたが，いっぽうではまた民芸運動を通して柳とも親交があっ

た。私事にわたることになるが，敗戦直後の混乱期に，柳宗悦からいただいたはがきがある。「お便り嬉しく拝見致しました。御無事の由を知りお悦びします。先日もお噂してゐたのです。金関さんも愈々帰省される由，お会いする日を待ってゐます。併し昨日或人から金関さんは支那に帰化するそうだといふ事を聞かされ，どちらが本当ですか。玉やビルはとうに焼け去りました。原稿こちらにお届け希へば幸甚です。御東上の事もあらば是非お立寄下さい。御健在をいのります。」日付は一九四七年七月一日となっている。つづいてもう一枚は，河合寛次郎作の陶器の色刷りの絵はがきで，「原稿お届け下され大変嬉しく拝見しました。君にも是非一筆寄稿希ひたく，御執筆下さらずや。マンカに関する貴著，いつぞや拝見，面白く読みました。金関さんのその後の消息お聞きの折はおしらせ下さい」とあり，日付は七月一六日となっている。私はこの年の五月ころ台湾から帰国しているが，そのとき金関先生から柳あての原稿を託され，それを送り届けたことがある。この二枚のはがきはその返事である。金関先生はひきつづいてなお台湾の大学に残っておられたので，そのため帰化説が流れたのであろう。

柳は 1943 年に来台し，『民俗台湾』同人の金関丈夫や立石鉄臣に連れられて台湾の民芸を収集した［柳・金関 1943］。その収集品は現在，日本民芸館に収蔵されている。池田は戦後，3 年間台湾に留用された後の 1947 年，郷里の島根県へと戻り，出雲民俗の会刊行の『出雲民俗』創刊号に寄稿をしたり，『民族学研究』に論文を投稿したりと日本のミンゾク学と関係していった[5)]。また，八雲町の安部栄四郎（1902-1984）が製作した和紙を棟方志功（1903-1975）の木版で飾り，柳宗悦，河井寛次郎（1890-1966），濱田庄司（1894-1978）らが執筆し，島根民芸協会より刊行された『出雲の紙』を編集し，自らが編者する雑誌『風土』三号で「河井寛次郎氏還暦記念号」を企画するなど，民芸運動とも深く関わりをもった。

我が国におけるもう一つの民俗学を形成した，渋沢敬三（1896-1963）によるアチック・ミューゼアムでは物質文化の調査・収集が実施された。これは「内地」だけでなく台湾でも実施され，多くの資料が「内地」へと持ち帰られたことは，研究史上で大きな意味があった。主な資料収集には鹿野忠雄，馬淵東一，宮本馨太郎（1911-1979）が関わった。これらの資料は，アチック解体以降は文部省の管轄となり，最終的には国立民族学博物館の所蔵となった。台湾の物質文化が日本国内の資料と同一のコレクションとして収蔵されていることは，まさに台湾のミンゾク学と日本のミンゾク学を結ぶ物的証拠なのである。

お　わ　り　に

これまで見たように，研究者のネットワークを考えるならば，日本植民地時代のミンゾク学は日本民俗学と深い関係にあったことがわかるだろう。それは相互に影響を受けながらの歩みであった。学問のスタイルが完成された現在の視点からすれば，台湾と日本を関係づけず個別に語るということが一般的だろう。しかし，そのような見方では見えなくなるものが少なからずある。時代時代の状況を鑑みながら，学説史を語ることが重要であると考えられる。

本稿で取りあげたように，台湾の物質文化自体や研究史を考えるということは，日本における民芸と民俗学の関係を再考する機会にもなる。つまり，日本本土では，両者が接点を持つことは限られており[6]，充分な検討がなされてこなかった。内地から遠く離れた台湾では『民俗台湾』にみるように，民芸・民俗学双方からの影響が見て取れる。それは精神文化と一体のものとして，ごく自然に物質文化についての記述や図示，グラフでの説明がなされていたことを物語っている。これは『民俗台湾』を主催した金関の思想を反映したものであろう。金関の思想は植民地台湾における，ミンゾク学の特徴の一つであるといっても過言ではないだろう。そうした柳田民俗学とは別のミンゾク学が存在していたことは，看過できない事実ではなかろうか。いや，もう少し踏み込んで検討してみると，内地の地方においては当初は双方からの影響を受けることが当然のものであったことを，両者が没交渉であったとの思い込みで論じてしまっていることに対して，問題提起をすることにもなるのではないか。物質文化をキーワードに学説史を紐解くことは，見えなくなってしまっている，民芸と民俗学との関係を掘り起こすことにもなろう。

注

1）ただし『民間伝承』には次の台湾関係の文献に関する書評・紹介が掲載されている。
池田敏雄・西川満　1940「七娘媽と海老の皮 ―― 華麗島民話集（一）――」『文芸台湾』1/2 日孝山房
池田敏雄　1940「虎姑婆」『台湾風土記』日孝山房
金関丈夫　1940「山東の瓜子姫」『台湾日日新報』1 月 14 日
黄氏鳳姿　1940『七娘媽生』東都書籍［以上，関 1935］
黄氏鳳姿　1943『台湾の少女』東都書籍［山口 1943］

2）婁子匡（1907-2005）は台湾の民俗学者，文学者。筆名は適翁。浙江紹興の出身で 1930 年に中国の中国民俗学会の創立に関与した後，1949 年に国民党に伴い来台。台湾の中国民俗学会会長などを務めた。

3）柳田は当初から図版を軽視した訳ではない。『石神問答』の初版には多くの図版が使用されている。しかしながら，後の『定本柳田国男集』ではすべて省かれている。

4）　須藤利一（1901-1975）は海事学者・民俗研究者で，台北高講師となり，1940 年に台湾で南島（琉球列島）研究会を設立し『南島』を発行した。

台湾で沖縄研究が注目されたのは，いくつかの理由がある。台湾を領有した関係上，船による移動の場合は沖縄を必ず経由するようになったこと，台湾へ沖縄から多くの移住者があったことが要因である。戦後のミンゾク学でも沖縄研究から台湾へとフィールドを広げていった研究者も少なくない。漢族研究の植松明石，渡邊欣雄，植野弘子，原住民研究の山路勝彦，笠原政治，山本芳美，宮岡真央子などがそうである。

5）　池田と同様に，『民俗台湾』に関わった，国分直一の弟子，潮地悦三郎（1925-1985）が日本に帰国後は，埼玉を中心とした民俗学に活動を限定したこととは対照的である［角南 2005a］。

6）　地方では必ずしも民芸と民俗学が対立していたわけではない。例えば長野県松本平では，民芸と民俗学のそれぞれの関係者が親しく交わっていた。研究者人口の少ない地方にあって，都市部のように民芸と民俗学それぞれの関係者が没交渉であると考えることは，現実的ではなかっただろう。

文　　献

池田敏雄　1944 『台湾の家庭生活』東都書籍

池田敏雄編　1952 『出雲の紙』島根民藝協会

池田敏雄　1959 「台湾の阿也都古」『出雲民俗』1：6-7

池田敏雄　1955 「福建系台湾人の出産習俗」『民族学研究』19/2：46-57

池田敏雄　1980 「柳宗悦と柳田国男の「不親切」」『民芸手帖』260：3-11

池田敏雄（末成道男編）　2003 『池田敏雄台湾民俗著作集』緑蔭書房

伊能嘉矩　1926 『遠野方言誌』郷土研究社

伊能嘉矩　1928 『台湾文化志』刀江書院

伊能嘉矩（森口雄稔遍）　1992 『伊能嘉矩の台湾踏査日記』台湾風物雑誌社

岩崎敏夫　1985 『柳田国男と遠野物語』遠野市立博物館

王京　2007 「戦時下の中国民俗研究」『年報人類文化研究としての非文字資料の体系化』4：171-192

王京　2008 『一九三〇，四〇年代の日本民俗学と中国』神奈川大学二一世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

大塚英志　2013 「あとがき」『柳田国男山人論集成』角川書店：435-444

国分直一　1985 「金関丈夫先生と「民俗台湾」の運動」『台湾民俗』湘南堂書局：49-55

小林保祥　1944 『高砂族パイワヌの民芸』三国書房

鈴木満男　1977 『華麗島見聞記』思索社

鈴木満男　1991 『柳田・折口以降：東アジアにおける《民俗》のトポス』世界書院

角南聡一郎　2005a 「湾生という生き方 ―― 三島格と潮地悦三郎の物質文化と台湾へのまなざし ――」『日本考古学協会第七一回(二〇〇五年度)総会発表要旨集』

角南聡一郎　2005b 「日本植民地時代台湾における物質文化研究の軌跡 ―― 雑誌『南方土俗』と『民俗台湾』の検討を中心に ――」『台湾原住民研究』9：131-154

関敬吾　1935 「台湾の昔話」『民間伝承』5/7：10

関口浩　2010 「折口信夫と台湾原住民研究」『成蹊大学一般研究報告』43 : 1-29
陳艶紅　2006 『『民俗台湾』と日本人』至良出版社
鳥居龍蔵　1917 「東北亜細亜に於ける無言貿易に就て」『人類学雑誌』32/8：222-233
馬淵東一　1973 「『南方土俗』景印本刊行に寄せて」『南方土俗・南方民族』東方文化書局：2-8
村井紀　2004 『新版南島イデオロギーの発生』岩波書店
山口寿々栄　1943 「台湾の少女」『民間伝承』9/8：59-60
山本芳美　2005 「柳田國男と台湾原住民研究」『南島史学』65・66 合併号：163-152
柳宗悦・金関丈夫　1943a 「台湾の民芸に就いて（上）」『民俗台湾』3/5 : 2-6
柳宗悦・金関丈夫　1943b 「台湾の民芸に就いて（下）」『民俗台湾』3/6 : 12-16
柳田国男　1928 「小序」『台湾文化志』上 刀江書院：1-6
柳田国男　1944 「推薦者の一人として」『高砂族パイワヌの民芸』三国書房：1-7
柳田国男　1989 『柳田国男全集』6 筑摩書房
柳田国男　2013 『柳田国男山人論集成』角川書店
柳田国男・橋浦泰雄・岡田謙・中村哲・金関丈夫　1943 「座談会柳田国男氏を囲みて」『民俗台湾』3/12 : 2-15
柳田国男・伊東圭一郎　1953 「民俗学と岩手⑤遺稿出版に奔走 伊能氏に私淑した板沢氏」『岩手日報』1953 年 1 月 6 日

要　旨

日本が戦前の50年間，植民地とした台湾で，ミンゾク学（民俗学・民族学）が内地との関係の中で，どのように形成されていったかを，研究者の動向と物質文化研究に着目しながら検討をおこなった。黎明期に重要な研究者として，鳥居龍蔵と伊能嘉矩があげられる。両者とも濃淡はあるものの，柳田国男と交わっている。柳田は台湾総督府による台湾原住民調査の成果を参照しながら，山人論を構想したことは注目される。日本国内での台湾への注目は，当時の民俗学関係雑誌に掲載された論文からも明らかである。台湾でも『南方民俗』，『民俗台湾』といったミンゾク学関連の学術雑誌が刊行された。台湾では研究者の人数も限られていたため，多分野の研究者との関係は密接であった。『民俗台湾』を主宰した金関丈夫は，柳田国男に敬意を払う一方で，物質文化にも着目し柳宗悦の民芸運動にも共感した。『民俗台湾』の主要メンバーであった池田敏雄は，金関の独特なスタンスを継承し，戦後は民芸運動や日本のミンゾク学と関わった。これらのことから，植民地時代台湾のミンゾク学の形成と発展は，日本民俗学と深く関係しており，一方で研究者のネットワークを考慮するならば，民芸運動からの影響もあったことを確認した。日本民俗学と民芸との接点について論じられることは僅少であるが，台湾の状況を見ると，地方で没交渉ではなく双方に影響を与えあったのではないかと考えられる。

キーワード：台湾，物質文化研究，民俗学，民族学，民芸

Abstract

This paper examines the emergence and development of *Minzoku* studies（folklore/ethnology）in Taiwan during the Japanese colonial period, with focus on the trend of researchers and material culture studies. In initial stage, TORII Ryuzo and INO Kanori were significant scholars who had relationship with YANAGITA Kunio, the founder of Japanese Folklore. YANAGITA also read the reports of field surveys on Taiwan indigenous people, that supported him to conceptualize *SANJIN*（mountain people）theory. There were many articles on Taiwan in Japanese folklore/ethnology journals, which showed Japanese researchers also had paid attention to Taiwan. In Taiwan, the magazine *Nanpo Minzoku*（Southern ethnos）and *Minzoku Taiwan*（Folk Taiwan）were launched. Researchers in Japan and Taiwan were closely related. KANASEKI Takeo, was a major member of *Minzoku Taiwan*, respected YANAGITA as well as YANAGI Muneyoshi who was the leader of the *MINGEI*（folk art）movement. IKEDA Toshio, another major member, succeeded KANASEKI's stance and participated in Japanese folklore studies and folk art movement in postwar Japan. As described above, the development of Taiwan folklore studies during the colonial period were closely and mutually related to Japanese folklore studies, that would be same to the folk art movement although not many mentioned.

Keywords: Taiwan, material culture studies, folklore, ethnology, folk art